

FIFA WORLD CUP QATAR 2022™

ドーピング検査の実態

FIFA World Cup Qatar 2022 は、強豪アルゼンチンが36年ぶり3回目の優勝で幕を閉じました。われらが日本は悲願のベスト8は逃したものの、三苫選手の1.88mmのスパースライディングからのゴールシーンはVAR (Video Assistant Referee) でも微妙な「三苫の神業」としてカタールのレガシーとなりました。

さて、激闘の裏ではFIFAはドーピング検査を実施していました。2022年12月12日に公表されたドーピング検査結果を紹介します。題して「FIFA implements comprehensive anti-doping testing programme for Qatar 2022™」

検査実績

- 2022年1月以降、競技会内外で2,846回のドーピング検査を実施。
- 1,433回の検査がFIFAによって直接実施され、合計3,909検体(1,433の尿、1,310の血清、1,060の全血、106の乾燥血液(DBS: Dried Blood Spot))。
- FIFAが実施した検査の78%は競技会外検査であり、22%は競技会内検査でした。
- 2021年11月21日から、大会前にFIFAによって1,064件の検査が未発表検査として実施され、2,968検体が分析に利用した。
- 大会中、準決勝前までに369件の検査を実施し、941検体を分析した。
- さらに、244件のワールドカップ大会予選の検査が実施され、試合ごとに各チーム少なくとも2人の選手が検査を受けた。
- 結果的に、準々決勝に進出した8チームの全選手が平均4.6回の検査を受けており、そのうち数人は最大10回の検査を受けた。また、ワールドカップに参加する全ての選手は、その前年の大会前(予選トーナメント)から、少なくとも、1回検査を受けている。

その結果、大会前検査で5人が陽性となり、出場停止処分を受けた。

処分内容

1. 2021年9月8日に行われた試合後にクロステボール^(註)(タンパク同化薬)陽性となったエルサルバドルの、エリックアレハンドロリベラは、2025年10月5日までの4年間の出場停止処分。

注: クロステボールは日本では動物用医薬品(牛、豚及び鶏対象)として承認されたホルモン剤。ヒトは未承認。

2. 2021年11月12日に行われた試合後に外部から投与されたテストステロン(タンパク同化薬)陽性となったジブチのサブリー・アリ・モハメド選手は、2026年1月11日までの4年間の出場停止処分。

3. 2021年11月16日に行われた試合後にトリメタジジン(代謝調整薬「狭心症治療薬」)陽性となったコートジボワールのシルヴァン・グボホウオ選手は、2021年12月23日から18か月の出場停止処分。



<https://www.insidethegames.biz/articles/1131583/fifa-world-cup-qualifying-doping>

4. 2022年2月2日に行われた試合後にクロステボール(タンパク同化薬)陽性となったホンジュラスのウィズダムニアイティクエジュライ選手は、2023年8月1日に終了する18か月の出場停止処分。

5. 2022年9月21日に競技会外の検査(抜き打ち検査)でクロステボール(タンパク同化薬)陽性となった、コスタリカのオルランド・モイセス・ガロ・カルデロン選手は、2022年10月19日に一時的な出場停止となり、完全な調査が行われるまで保留。



<https://www.afpbb.com/articles/-/3429640>

クロステボールは3選手、テストステロンは1選手であり、両物質は筋肉マッコ(増強効果)を期待してのタンパク同化薬。トリメタジジンは、北京冬季オリンピックでも問題になったフィギアのワリエワ選手から検出された物質と同じ成分です。狭心症などの患者への治療薬。

FIFAも組織あげてアンチ・ドーピング活動を展開していますが、光の裏には影があります。クリーンスポーツを目指しアンチ・ドーピング教育は重要性を増しています。

スポーツファーマシスト 川村 仁
(青森大学薬学部)

引用資料: <https://www.fifa.com/legal/anti-doping/news/fifa-implements-comprehensive-anti-doping-testing-programme-for-qatar-2022>